
微糖コーヒー

鳶坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微糖コーヒー

【Nコード】

N9382C

【作者名】

鳶坂

【あらすじ】

新任教師の村田は、何をやってもうまくいかず、生徒たちの反抗によって学級が荒れ放題になってしまった。授業中にボールが飛び交い、渡したプリントは直ぐ破られる。そんな荒れた学級に一人の転入生がやって来る。それをきっかけに村田は、教師として、人間としても成長して行く。

第1話

僕は今日、教師人生の中で初めて生徒を殴った。

鈍く響く音に、教室が一瞬にして静まり返った。生徒たちの目が大きくなり、眉の位置が数センチ上に上がったかのように見えた。

どうしてだろう。そんなに強く殴ったわけではない。けれど僕の手はとても痛かった。殴られた生徒も、痛みよりも驚きのほうが大きいようだ。

「殴った……先生が殴ったぞ！体罰だ！体罰だ！」殴られた生徒が有らん限りの声を出した。その声は静まり返った教室によく響いた。

「そうだ……。。。。。。体罰だ！体罰！体罰！」周りの生徒も体罰コールをし始めた。「目は口ほどにものを言う」と言うが、まさしくその通りだった。今の彼らの目は、僕に対する嫌悪感と憎しみが込められている。

何か言わなきゃ。でもなんて言ったらいいんだろうか？謝るのか？いや謝るとますますなめられてしまうだろう。それだけはだめだ。

「先生が何のためにこんな事をしたかを、君はわかってないんですか？」やっと出てきた言葉がこれだ。

「なんだよ？殴ったくせに、やけに態度でかいな」そして彼は一呼吸おいてこう言った。「訴えるぞ。謝ったら許してやるよ、土下座な、どーげーざっ」クラスの男子生徒が何人が立ち上がった。「そうだ。土下座しろ！暴力教師！」そして次々と生徒たちが僕に土下座を要求してきた。

僕はもう何がなんだか、わからなくなった。生徒のためにと思っ
てやったつもりだ。しかし生徒にはこの気持ち伝わらなかった。

僕はその場から今すぐ逃げ出したかった。

その時、すこし雑音の入っている、いつものチャイムが鳴った。

「じゃあ、今日はもう終わりです。原田くん、次はあんな事しないように」

「あんな事って、いらねープリント破っただけじゃねーかよ」そう言っつて、その破いたプリントを蹴り飛ばした。

僕は何も言わずに教室から出た。

僕の名前は村田剛^{むらたたくし}、別に教師になりたくてなつたわけではなかつた。ただ小学校高学年辺りから母親が僕をどうしても公務員にならせたがつていた。僕は中学入学と同時に塾に入り、県内では有名な進学校の高校へと入学し、そして国立大学の教育学部を経て、母親念願の公務員、中学校教員になった。教科は国語を教えている。担任もやっつていて、先ほど授業していた3年1組だ。しかし生徒とうまくいっつてないため、クラスは荒れ放題だった。

「村田先生。校長先生がお呼びですよ。」
職員室に入つてきた中村涼子先生^{なかむらりょうこ}が、僕にそう伝えた。涼子先生は、英語の先生で隣の二組の担当だ。彼女は若く経験も少ない点では僕と同じはずなのに、生徒たちからは絶大の人気を誇つていた。生徒の話によると（盗み聞きしてたわけだが）彼女はとても落ち着いていて、生徒が何かいけないことをしても優しく注意してくれるそうだ。僕も習つてやっつてみたが、ますますなめられるだけであつた。

男子生徒からも特に人気がある。ずばり容姿だ。顔は童顔で可愛らしく、背は低めだが、そこが可愛らしさをより引き立てている気がした。髪が長く、一つに束ねていた。

「え？何か？」

「いや校長先生がお呼びですが……」

念のために確認したがその言葉はやはり「校長」であつた。その言葉を聴くと一瞬にして鳥肌が立った。先ほどの行為がもう校長の耳に届いたのであろうか。

「どうもありがとございます。今から校長室に向かいます」
すぐくゆつくりと校長室に行きたかったが、あいにく職員室の向かいだった。目と鼻の先にある距離だ。校長室の前にやって来た。ドアを三回ノックした。「はい、どうぞ」校長先生の声が返ってきた。ドアを開き中に入った。校長先生と、もう一人見知らぬ制服を来た中学生とその母親らしき人が向き合うようにして椅子に座っていた。

校長は、少し失礼かもしれないが、白髪が銀のように綺麗な人だった。別に禿げてもない。彼はいつでもここにこしていた。それがたまに怖いときがある。

隣の見知らぬ学生は、きっちりとした身なりで、座っているのがよくわからないが、身長はかなり高そうだ。顔は全てのパーツが整っていて、文句のつけようが無い美男子だった。

「君のクラスのー・・・ほら、転入生の新井くんだよ」
安堵と共に、転入生の事をすっかり忘れてた自分に驚いた。そう今日挨拶しに来るとか言ってたっけ？

当の新井くんは緊張してる様子も無く、かと言ってだらしない様子を見せてるわけでもなく、静かに僕に会釈した。

「ああ。君が新井陽あおいくんだね。僕が君の担任の村田剛。よろしくね」

「よろしくお願いします」新井くんは立ち上がり綺麗に礼をした。

その後僕は、学校生活の様子などについて話した。彼は見るからに真面目そうで、熱心に僕の話聞いていた。

「じゃあ、明日から学校くるんだよね、よろしく」僕は彼と握手をした。その手は思ったよりも大きくて驚いた。

彼はその後母親と一緒に帰り、僕は自分のクラスに帰りの連絡をしに教室へと戻った。思えば彼の目はこの時から何かを見据えていた。

第2話

朝は小さい頃から苦手だった。眠気というものは毎日僕につきまとい、その上、僕は教員になってからというものの、寝つきも悪くなっていた。

職員室に着いた。「おはようございます」元気に発したつもりだったが、気持ちとは裏腹になんとも情けない声が出た。自分の机に向かおうとすると、そこに新井くんがいたことに気づいた。やはり立っているのかなり大きい事に気づく、180センチあるかないかくらいだろうか。

先日、なんの取り柄もないこの学校に入学してきた新井くんは、僕と一緒に教室に入って彼を紹介することになっていた。よくドラマとかである、「今日は転入生を紹介する」みたいな感じだ。それを提案したのは他でもない校長だった。「その方がインパクトがあつていいだろう。インパクトがある方が、クラスメイトとも仲良くなれるはずだ」彼はにこにこしながら新井くんにそう言うと、新井くんは嫌な顔一つせずにそれに同意した。

「ねえ。今日から新しい学校生活が始まるわけだけど、どうだい？緊張している？」彼が緊張してしまうと思ひ、とりあえず何か話しかけた。「そうですね、でもたぶん大丈夫ですよ。うまくやっついてくれると思います」と言いつつも彼の声には緊張した様子が微塵も感じられないほどに落ち着いていた。「まあ、元気が取り柄だけのクラスだから、すぐうちとけられると思うよ」元氣すぎて困っているのが現状なのだが……。数分後、チャイムが鳴った。「行こうか」新井くん呼びかけ僕らは、職員室を出た。

教室に着くと、珍しく、男子も女子も生徒全員がおとなしく座っていた。いや、よく見ると座っていたと言うより眠っていた。なんのつもりであろうか。僕は彼らを起こそうと思ひ勢いよく戸を開けようとした。しかし戸は音を立てて抵抗した。壊れたかと思ひながら、

そうではない。カギがかけられているのだ。「おい。みんなどうした。開けてくれ」戸を叩きながら僕は彼らに呼びかけたが。彼らはピクピク動いてるだけであつた。そうか。そう来たか。カギを閉めて僕を教室に入れないつもりだな。生徒たちがピクピク動いてるのは、笑いを必死にこらえてるからであらう。「開けてくれ！おい！起きてるんだろ！」さらに戸を強く叩く。それでも彼らは狸寝入りを続けた。

「先生。僕は黙つて彼らを見ていたほうがいいと思いますよ」隣で様子を見ていた新井くんが僕にそう言った。「え？でも」「一人の生徒としての意見です。彼らはおそらく先生が困つて居る様子が楽しくてやつてるんでしょう。放つておいた方がいいと思います」僕は反論しようとした直後に彼は僕よりも大きな声でそう言った。僕は言われるがままにそうすることにした。

しばらくすると、男子生徒の一人が、僕が何処かへ行つたと思つたのか起きだしたが、僕がまだ廊下にいることを知るとすぐに寝たフリをまたし始めた。しかし彼は、見慣れない制服姿の学生が僕の隣にいることに気づいたのだろう。彼はまた起きだしこの事を報告したようだ。生徒たちの視線が一斉にこちらへと向かれた。教室は、完全に窓を閉めているにも関わらず、廊下にまでその声が聞こえるほど騒がしくなつた。そして堪忍したのか、ついに戸を開けてくれた。

「いやー先生が来るとは思わなかつたよ。みんな眠っちゃつてさ。ごめん、ごめん」以前僕に叩かれた、原田くんが僕にそう言った。内心また体罰の事を言われると思つてピクピクしていたが、本人はそうやられるのが慣れつこのようだった。

「今日は、見ての通り、我が3年1組転入生がやつてきた。それが彼だ」そう言つと、多くの女子生徒たちの歓喜の聲が上がつた。早くも新井くんはクラスの女子を虜にしたようだった。一方、そんな様子を見た男子生徒たちはつまならそうな顔をして新井くんを見ていた。

「新井陽です。よろしくお願ひします」彼はそれだけ言うと、礼をした。原田くんがいきなり机の上に立ちこつた。「陽か！おい陽！俺は原田剛。名前は書きも読みも先生とまったく同じだが、こいつみたいには情けないやつじゃないんだぜ。まあそれはともかくよろしくな！」生徒が一斉に笑つたが、新井くんは口を堅く結んでいた。

「じゃあ、新井くんそこに空いている席があるから、そこに座つてロッカーは左上から番号順だからね。それじゃあ朝の挨拶をしましよ」そして、僕と新井くんの、最初の学校生活が始まつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9382c/>

微糖コーヒー

2010年12月5日11時01分発行